

二つのドストエフスキイ像の間で





① ラウフェルトの肖像写真とバウマンの肖像写真

今回の写真は1872年、ペテルスブルクでB. Я.ラウフェルトにより撮影されたものです。1867年ドストエフスキイは、債権者たちから逃れるため、若い妻ソフィアと共にロシアを離れ、1871年に帰国するまでの四年間ヨーロッパ各地を転々としします。この間の写真は残されていません。前回我々が見た1863年のA.O.バウマンの写真から九年が経ちます。

前回の写真の内に我々が認めたのは、ロシア社会の混沌、ヨーロッパの混沌、そして彼自身の内なる混沌。これら何重にも重なる混沌を向こうに置いて、それらに正面から闘いを挑むかのようなドストエフスキイの意志と生命力に満ちた表情でした。その後『地下生活者の手記』(1864)から始まり、『罪と罰』と『賭博者』(1866)を経て、『白痴』(1868)、『永遠の良人』(1870)へと続き、この写真が撮られた1872年には、前年から「ロシア報知」に掲載中の『悪霊』が完成します。『未成年』(1875)と遺作『カラマーゾフの兄弟』(1880)を残し、彼の大作の殆んどが、この九年の間に産み出されたのです。

改めて前回のA.O.バウマンの写真と今回の写真とを較べて見ましょう。我々は彼の表情に現れた変化の大きさに驚かされずにはいません。前回の前面に打ち出された生命力や、野心的とさえ言える強い表情はここでは影を潜め、代って深く内に沈潜する内面性が前面に出て、その静謐さに思わず息を潜めさせられるような思いさえします。ドストエフスキイの内なる霊性が最も端的に捉えられた写真とさえ言えるかもしれません。この九年間に書き上げられた作品が扱った、人間の心を捕えて離さない様々な悪魔的情熱の問題、罪と罰と赦しの問題、神の存在とニヒリズムの問題、世界転覆の試みとその挫折の問題等々・・・ドストエフスキイが人間と世界と歴史の内に見出した光と闇、また彼自身が内に抱える問題の複雑さと深刻さとが、あの意志や生命力の直接的な表出を奪い去ってしまったのかも知れません。

しかし注意すべきですが、内面性とか霊性という言葉を用いたものの、この写真に現われ出たものが、ドストエフスキイの内面性や霊性が最後まで透徹され尽くし、究極の完成体として表現されたのかということ、決してそうとは言えないように思われます。ここに

るのは、肯定と否定、光と闇、神と悪魔の分裂を内に抱え、その分裂をじっと見つめ苦悩し、怯えたようにさえ見えるドストエフスキイであり、一步誤れば^{くずお}頹れてしまい兼ねない危機の淵にあるようにも見えるドストエフスキイです。そこから来る深い内面性と静謐な精神性、霊性とも言えるでしょうか。

この九年の間に彼が取り組んだ二つのイエス像。これらを思い出してみるのも、この写真にアプローチする一方法かもしれません。『白痴』におけるドストエフスキイとは、H.ホルバインの絵画と重ね、十字架から降ろされたイエス・キリストの見るも無残な死体を提示し、そのキリストの復活への展望を得られぬままに作品を終わらせたドストエフスキイです。また『悪霊』においても、ある男に取り憑いた悪鬼たちを二千頭の豚群の内に追いやり、ゲラサの湖に雪崩を打って飛び込ませ滅ぼし尽くしたイエス・キリストを^{エビダラフ}冒頭に置きつつも、その悪鬼が追い払われた男の癒しそのものは描き得ずに終わるドストエフスキイです。アリョーシャやゾシマ長老を通して、彼が正面から肯定的なイエス・キリスト像を提示するまでにはあと八年、『カラマーゾフの兄弟』まで俟たねばなりません。



②ラウフェルトの肖像写真とペローフの肖像画

今回の写真が、初回取り上げた肖像画と同じ年1872年のものであるということにも興味が湧きます。既に名声を博していた画家ペローフが描いたこの肖像画は、完成時から多くの人々に受け容れられ、ドストエフスキイ自身も相当これを気に入っていたようです。事実この肖像画はドストエフスキイの精神性を堂々と押し出し、その後一世紀半を経た現在でも、世界中でドストエフスキイと言えはまずこの肖像画が思い浮かべられるほど、「立派な画家」の手になる「立派な肖像画」であることは間違いありません。決してこれは皮肉ではありません。

しかし初回にも指摘したのですが、このペローフの肖像画にドストエフスキイの全てが描き込まれたかどうかというと、我々は決してこの肖像画が既に勝ち得ている名声ゆえに、その前で「思考停止」してはならないでしょう。このことを教えてくれる最も良き例が、今回のラウフェルトによる肖像写真ではないでしょうか。彼が捉えたドストエフスキイ

とは、ペローフの肖像画のように「永遠の名声」を勝ち得たものではありません。しかし改めてこれら二つのドストエフスキイ像を前にする時、ラウフェールトが一瞬の内に映し撮ったドストエフスキイとは、その内に闇と光の両者を深く宿し、深い混沌の中にやがて現われ出る秩序を予感させる静謐さを深く湛えた、実に味わい深い一枚の写真として我々の前にあるように思われるのです。

ドストエフスキイと取り組むということは、その巨大な作品群と取り組むことであるのは言うまでもありません。しかし様々な肖像画や肖像写真が表現するドストエフスキイ像もまた、我々が正面から対峙し、我々自身の頭と心とを総動員して読み解くべき作品群であり、また大きな「謎」として存在していることを我々は忘れてはならないでしょう。

今回は、これら二つのドストエフスキイ像の間にある「謎」と対峙してみてください。